

ガラテヤの信徒への手紙 2 章 11～21 節

2019 年 11 月 26 日

古本 靖久

1、聖歌 451 番 「千歳の岩よ わが身を囲め」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 344 ページ）

4、今日の内容

これまでの内容を、簡単におさらいしましょう。熱心なファリサイ派であったパウロは、もともと教会やキリスト者を迫害していました。ステファノの殺害にも賛成し、その場面にもいました。

しかしダマスコでの出来事をきっかけにパウロは回心し、福音を伝えていきます。ガラテヤはパウロが伝道旅行の際に、訪れた場所の一つです。

導入	1 : 1～5	挨拶
	1 : 6～9	異なる福音
福音の啓示	1 : 10～12	神から示された福音
	1 : 13～24	啓示の前後
	2 : 1～10	エルサレム使徒会議
	2 : 11～14	ケファ(ペトロ)批判
	2 : 15～21	信仰による義

ところがパウロの耳に、ガラテヤの人たちの心が乱されているという話が聞こえてきます。そこでパウロは、ガラテヤの教会の信徒に向けて、手紙を書くことにします。これが今、わたしたちが聖書で目にすることができる「ガラテヤの信徒への手紙」です。

パウロはまず、自分は神さまによって使徒とされたことを強調します。それはガラテヤの人たちを惑わす人たちが、パウロはエルサレムの共同体では指導者として認められていないと言っていたからかもしれません。

それ以上にガラテヤの人たちを惑わしたのは、「ほかの福音」というものでした。他の福音といっても、別に何かあるわけではなく、パウロが伝えた福音とは全く違うものでした。それは割礼を施したり律法を守ったりすることによって救われるというものだったのです。

それは違う、行いなど必要ない。パウロはそのことをガラテヤの人に理解してもらおうと、筆を進めます。エルサレム使徒会議でペトロやヤコブと握手し、それぞれの立場を尊重していくことを確認しました。しかし、事件は起こったのです。

5、節ごとに

◆ケファ（ペトロ）批判

2:11 さて（しかし）、ケファがアンティオキアに来たとき、（彼に）非難すべきところがあったので、わたしは面と向かって（彼に）反対（対立）しました。

前回取り上げたエルサレムの使徒会議の中で合意がなされたのは、異邦人に宣教する際に割礼など何も強要する必要はないということでした。

ユダヤ教の伝統を重んじていたケファ（以下ペトロ）やヤコブにとって、あるいはユダヤ人キリスト者にとっては、とても大きな決断だったと思われます。



しかし、エルサレムの北 500 km のところに位置するアンティオキアで事件が起こります。アンティオキアには多くのユダヤ人が住んでいました。彼らは経済的にエルサレムを支えていたようです。またユダヤ教に関心を抱く異邦人も少なからずいたようです。

2:12 なぜなら、ケファ（彼）は、ヤコブのもとからある人々が来るまで（前）は、異邦人と一緒に食事をしていたのに、彼らがやって来ると、割礼を受けている者たちを恐れてしり込みし、身を引こうとした（自らを分離し始めた）からです。

ペトロがパウロの元に来たのは、パウロの宣教活動の様子を聞きたいと思ったのかもしれませんが。アンティオキアでの出会いの中で、ペトロは異邦人とも一緒に食事をする関係になっていました。

しかしエルサレム教会の指導者の一人、ヤコブが派遣した人が来ることを知り、ペトロは自らを分離し始めます。つまり、異邦人と自分との間に、壁をつくったのです。

ユダヤ人にとって、誰と一緒に食事をするかは、とても重要なことでした。アンティオキア教会の信徒の多くは、おそらくエルサレム教会から迫害を避けて移住したユダヤ人キリスト者だと思われます。ユダヤ人は、罪人、徴税人、そして異邦人とは共に食事をしませんでした。聖書には、そのような行為をするイエス様を非難する彼らの姿も描かれます。

ペトロは割礼を受けている者、すなわちユダヤ人を恐れしました。異邦人との交流をしている自分に気づき、徐々に態度を変えていきます。食事についても一緒に食べなくなり、ついには食事の席にも来なくなったのでしょ

2:13 そして、ほかのユダヤ人も、ケファ（彼）と一緒にこのような心にもないこと（偽善）を行い、（それで）バルナバさえも彼らの見せかけの行い（偽善）に（よって）引きずり込まれて（引き離されて）しまいました。

その行為は、パウロの目には「偽善」と映りました。異邦人にとっても、このペトロの行為はショックだったことでしょう。「何で食べないのですか？」、「どうして食事の時間に来てくれないのですか？」、そのような問いかけもなされたかもしれません。

そしてパウロと共に歩んできたバルナバさえも、同じようにユダヤ人の顔色をうかがってしまいました。パウロとバルナバはこの時から袂を分かち、別々に行動することになります。

使徒言行録によると、パウロとバルナバは、途中で一度離脱したマルコを宣教旅行に連れて行くかどうかで意見が分かれたと書いてあります。しかしここでは、異邦人伝道に対する意見の食い違いが原因となっています。原因が複数あったのか、それともエルサレム教会を悪く言わないために、使徒言行録は前者の理由のみを書いたのでしょうか。

2:14 しかし、わたしは、彼らが福音の真理にのっかって（対して）まっすぐ歩いていないのを見たとき、皆の前でケファに向かってこう言いました。「（もし）あなたは（が）ユダヤ人でありながら、ユダヤ人らしい生き方をしないで、異邦人のように生活しているのに（生きるならば）、どうして（あなたは）異邦人にユダヤ人のように生活する（生きる）ことを強要するのですか。」

割礼とともに、食事規定はユダヤ人にとってアイデンティティをあらわすものです。これによって、ユダヤ人は異邦人と自らを分離してきました。しかしこれらの決まりによって異邦人を同化したり排除したりすることは、すべての人たちに神さまの恵みが与えられるという福音からは逸脱します。

ペトロの行為は異邦人キリスト者に対し、ユダヤ人キリスト者とも食事ができるように、「ふさわしい者」になれと強要しているのです。それはおかしいと、パウロはみんなの前で指導者であるペトロを糾弾したのです。

<ここまでの箇所から>

正直、ペトロの気持ちもよくわかります。自分の中で「真理だ」と思っていることがあっても、そうではないことも大事だと思っている人の前では、自分の思いを押し殺し、その場の状況にあわせることはよくあります。特に聖公会のように多様な考え方を受け入れている教派では、多いのではないのでしょうか。心の叫びでした。

◆信仰による義

2:15 わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような（からの）罪人ではありません。

ここから、パウロの考えがガラテヤの人たちに示されます。小見出しにある「信仰による義」とはパウロの教えの特徴で、「信仰義認」という言い方もされます。

この節の言葉は、今のパウロの考えではありません。「わたしたち」とは、ペトロやアンティオキアのユダヤ人キリスト者、そして回心前のパウロを指しているのだと思います。彼らはユダヤ人こそが神さまに選ばれた民族であり、罪から離れた者だと考えていました。

一方異邦人は、罪人と結び付けられていました。律法を持たない彼らは、神さまとの契約の外にいると考えられていたからです。またユダヤ人であっても律法を守らない（守られない）人たちも、共同体の外にいる罪人だと定めてしました。しかしイエス様は、そのような人たちと共に食卓を囲んでいたはずで

2:16 けれども、人は律法の実行（行い）ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト（救い主）イエスを信じました。これは、律法の実行（行い）ではなく、キリストへの信仰によって義とさせていただく（される）ためでした。なぜなら、律法の実行（行い）によっては、だれ一人として義とされないからです。

この 2 章 16 節は、パウロの信仰義認の中心となる箇所です。「イエス・キリストへの信仰」という言葉は、新しい聖書では「イエス・キリストの真実」と訳されています。今使っている訳の方が、理解はしやすいかもしれませんが。信仰という言葉には、信頼という意味も含まれます。ただイエス様にすべてを委ねることで、人は義とされるのです。

律法の行いによって生じるもの、それは自分たちだけが神さまの祝福を独占できるという思いと、律法を持たない他民族を排除することです。しかし厳密にいうと、律法の行いで義とされる者はいないのです。

あなたの僕を裁きにかけてください。御前に正しいと認められる者は 命あるものの中にはいません。（詩編 143 編 2 節）

2:17 （しかし）もしわたしたちが、キリストによって義とされるように努め（求め）ながら、自分自身も罪人である（とみなされる）なら、キリストは罪に住える者（の給仕）ということになるのでしょうか。決してそうではない。

この言葉の背景には、アンティオキアの出来事があります。つまり異邦人と一緒に食事をするのが罪だとするならば、異邦人との食事を動機づけたイエス様は、罪人を生み出す人、いわば罪の食卓の給仕役だと言えるのではないのでしょうか。

2:18 (なぜなら) もし自分で打ち壊した(破壊した)ものを再び建てるとすれば、わたしは自分が違犯者であると証明することになります。

パウロが破壊したのは、律法による義です。いわゆる「行為義認」です。パウロは、人は行いによって義とされるのではなく、信仰によってのみ義とされると説きました。割礼や食事規定など、それらのものは関係ないと言ってきました。

再び建てるとは、パウロが自分の主張を覆し、エルサレムやアンティオキアにいるユダヤ人キリスト者の教えに同意することです。そうになると、改宗者に割礼を施さず、異邦人と食事を共にするパウロは、律法の違反者とみなされることになります。

2:19 わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって(を通して)死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。

パウロの行為は、律法違反です。律法が人を裁くとすれば、パウロは死に値します。しかしこの律法に対する死によって、パウロは律法から解放されるのです。

イエス様は十字架の死によって、神さまのみ心をあらわしました。それはわたしたちが罪の鎖から解放され、神さまに対して生きることです。罪に対して死ぬ、十字架につけられることによって、わたしたちは生きる者とされるのです。

2:20 (つまり) 生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において(の内に)生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。

パウロはここで、自らの体験に基づいた非常に個人的な神学を展開します。パウロはダマスコの途上で復活のイエス様と出会い、目が見えなくなりました。アナニアによって目が開かれたときには、パウロの心の向きは180度変わっていました。

律法を行うことで自分を正当化し、他者を迫害していたパウロの姿は、そこにはありません。パウロは一度死に、今はキリストによって生かされているのです。

洗礼のときに、全身を水に沈める教派があります。このやり方は、水の中にもぐることと土の中に埋められることとを結びつけます。つまり死を連想させているのです。

2:21 わたしは、神の恵み~~を無（駄）~~にはしません。（なぜなら）もし、人が律法のお陰で（を通して）義とされるとすれば、~~それこそ、~~キリストの死は無意味（無駄）になってしまいます。

神の恵みとは何でしょう。それは神さまから一方的に与えられるものです。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。（ヨハネによる福音書 3 章 16 節）

という言葉の中にも示されている神さまの愛です。

その恵みを受けていながら、自分の力で義とされようとする。その過程において、周りの人を排除し、自分の思いを強要し、自分の正しさの中で生きていこうとする。

その先にあるのは、滅びです。なぜなら人は、誰一人として完全ではないからです。すべての人は、罪人なのです。だからこそ、神さまはイエス様を遣わされました。そして十字架の死によって、わたしたちを生きる者として下さった。自分の力で生きていけるのであれば、イエス様の死は無駄になってしまうのです。

<今日の箇所から>

パウロは徹底的に、人は信仰によってのみ義とされることを説きます。あまりにも強烈な物言いに、少し怖ささえも感じてしまいます。今まで律法を土台として生きてきた人にとって、その土台を取り除かれることは、恐ろしいことだったに違いありません。

わたしたちは律法を大切にしているわけではありません。割礼や食事規定とも無縁です。ですから「信仰義認」と聞いても、そんなに違和感がないかもしれません。しかしわたしたちも、「行い」によって正しいものとされると思ったことはないでしょうか。

わたしは中学生のころ、毎週礼拝にちゃんと出席することで天国に行けると信じていました。大人になって教会に戻ってきたころ、献金を人よりも多く出すことで神さまは目をかけてくれると思っていました。礼拝堂の掃除を率先してやると、神さまから何かご褒美があるかもしれないと期待していました。

それらのことから、心を解放させるのです。神さまはわたしたちすべての人を救おうとされました。それが神さまのみ心です。行いなんて必要ない。ただ神さまにすべてをお任せする。それが大事なのです。

今回の学びは、これで終わります。次回は 1 月 23 日(木)10 時 30 分～で、「律法か、信仰か（ガラテヤ 3：1～14）」について学んでいきたいと思ひます。